

ビルマ・カレン族

忘れられた辺境闘争

タイ・ビルマ(ミャンマー)国境

地帯では、民族解放を唱えるカレン族がゲリラ闘争を続けている。彼らが武器を持って立ち上がったのは一九四九年一月三十一日。闘争の歴史は、ほぼ半世紀にもなる。大国の利害に絡んでこなかったアジアの最辺境で、カレン族による、民族の存亡をかけた戦いに終わりが見えない。

ろうそくの灯りの下で、前線に行くための打ち合わせが続いていた。だが、空を真っ白にする迫撃砲が気になり、司令官の話に集中できない。防衛用の地雷に囲まれている旅団の司令部でさえ安心できない。司令部が二週間前、ビルマ政府軍からの攻撃を受けたと、たった今説明されたからだ。腹に響く重たい爆発音が伝わり、これから、最前線に向かうのだな、と改めて実感する。

戦闘の続く最前線やカレン族の解放区へ到達するのは、年々困難になっている。歩きやすい道は、ほとんどが政府軍によって押さえられているからだ。カレン軍側には、四つん

這いになって這い上がらなければならない急な崖や、地雷の恐怖に怯えながら進む山道しか残されていない。い。

カレンの村に到着してもゆつくりと休んでいる暇はない。村人から、ビルマ政府軍による略奪や焼き討ちの話聞き終わるとすぐに次の村へ移動しなければならぬ。政府軍の奇襲に備えて三時間と同じ村に留まることはできない。

圧倒的な物量に勝る政府軍を前にして、カレン軍の軍事的勝利はまずあり得ない。しかし、それでも彼らは戦いをやめる訳にはいかない。タイ国境に逃れている一〇万人もの難民や、今も昔も、カレン族独自の土地を夢見て、闘争を支えてきた村人たちが目の前にいるからだ。

^写真キャプション^

・タイ・ビルマ国境であるモ工河を下り、前線から旅団司令部へ戻るカレン兵。要所を政府軍に押さえられているため、鋭く周囲に目を配る。

・ご飯、魚醬、野草のスープが兵士

たちの日々の食事の「定番」だ。

・前線への移動中、休憩をとるカレン兵。いつときの静寂をかみしめる。

・カレン軍の自家製地雷。埋められている正確な位置が不明で敵味方なく負傷者が出ている。

・旅団司令部の前に整列するカレン兵。